

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00427

研究課題名(和文)近代イギリスのコメディ・オヴ・マナーズの発展と都市空間の変貌の相関関係の研究

研究課題名(英文)The Correlation between the Development of Modern Comedy of Manners and the Transformation of Urban Space

研究代表者

末廣 幹 (Suehiro, MIKI)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：70264570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：イギリスにおける演劇ジャンルのコメディ・オヴ・マナーズの歴史的検討では、それぞれの作品においてマナーズ(風習/慣習)を成立させていた社会がどのような共同体なのかを明らかにする必要がある。本研究では、王政復古期以降のイギリスに見られる社会の変化、とくにロンドンの都市空間の変貌に注目しながら、コメディ・オヴ・マナーズの発展との相関関係を検討し、王政復古期から18世紀にかけて、このジャンルの演劇が、同時代の都市空間の変貌を研究する上できわめて重要な対象であったことを明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、17世紀から18世紀にかけての社会変動に焦点を当て、その変動に対応するコメディ・オヴ・マナーズの展開と都市空間の変貌と間のダイナミックな相関関係を広範かつ詳細に明らかにできる点にある。17世紀後半から18世紀にかけてのイギリスではいわゆる「プライベート化」、すなわち市民階級の台頭による私生活化の進行が起こった歴史上特筆すべき時代であり、登場人物の欲望とマナーズの相克に焦点を当てるコメディ・オヴ・マナーズと都市空間の変貌を同時に研究することで、巨大都市ロンドンにおける屋内空間の役割にも迫ることができる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the correlation between the development of comedy of manners and the social changes seen in Great Britain since the Restoration, particularly the transformation of London's urban space, and reveals that this theatrical genre was an extremely important subject for studying the transformation of urban space during the period from the Restoration to the 18th century.

It is an attempt to clarify how this theatrical genre formulated the manners that dominated a particular social space by setting it on stage, and to provide a model for a new field of urban cultural history research that, while based on theatrical research, crosses social history research, urban history research, and architectural history research with cultural history research.

研究分野：近代イギリス演劇研究

キーワード：王政復古期 演劇 コメディ・オヴ・マナーズ 都市空間 劇場 社交空間

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、王政復古期以降のイギリスに見られる社会の変化、とくに都市空間の変貌に注目しながら、コメディ・オヴ・マナーズの発展との相関関係について検討するものである。

コメディ・オヴ・マナーズという演劇ジャンルが、王政復古期以降、現代にいたるまでイギリス演劇の伝統の主流であり、ジェイン・オースティンの小説をはじめとするノヴェル・オヴ・マナーズと呼ばれる小説群にも多大な影響を及ぼしたことは、John Palmer (1962)、Kenneth Muir (1970)やわが国の論文集『風習喜劇の変容 王政復古期からジェイン・オースティンまで』(1996)でも研究されてきている。イギリスにおけるコメディ・オヴ・マナーズの歴史を検討する際には、それぞれの作品において、マナーズ(風習/慣習)を成立させていた社会がどのような共同体なのかを明らかにする必要がある。しかし、これらの先行研究では、ロンドンの社交界において流通していたマナーズについては具体的に検討していても、社交界を成立せしめていた都市空間については等閑視されている。

他方で、王政復古期から18世紀にかけての文学の展開を都市空間の変容と関係づけようとしているのが Cynthia Wall の *The Literary and Cultural Spaces of Restoration London* (1998) である。1666年に起こったロンドン大火では中世以来ロンドンを構成していたロンドン・シティの家屋の85%が消失したのだが、Wallの研究は、大火後のロンドンの再建という都市の風景の変化と王政復古期以降の文学に見られる空間表象とを関連づけている。しかし、Wallは、ロンドン大火が都市空間の変貌に及ぼした影響を過大評価しているという問題もある。ロンドンは、宮殿と国会議事堂が位置する政治の中心であるウェストミンスター(宮廷) 経済や金融の中心であるロンドン・シティ、その間に広がるタウン(後のウェスト・エンド) さらには貧困層や移民層集中し始めていたシティの東の郊外(後のイースト・エンド)の4つの区域から成るのだが、ロンドン大火で、シティの大部分は焼失したものの、隣接するタウンは被害を免れていたからである。David Robertsの研究(2004)は、タウンに点在するマルベリー・ガーデン、セント・ジェイムズ・パークやハイド・パークなどのパーク(公園)が、1642年の内乱勃発以降に帯びようになっていた政治的・文化的含意を具体的に検討した上で、これらのパークが喜劇の舞台になっている意味を詳細に検討している。しかし、Robertsは、研究対象をパークに限定してしまったために、パークとタウンにおけるほかの社交空間との関係が等閑視されてしまっている。

本研究は、王政復古期から18世紀に上演された演劇、とくにコメディ・オヴ・マナーズに注目することで、このジャンルが、タウンにおける特定の社交空間(劇場、パーク、ニュー・エクスチェインジのようなショッピング・モール)を舞台にすることで、その場を支配していたマナーズをどのように定式化していたのかを明らかにする。さらに、そうしたマナーズの表象には、当時“gallant”と呼ばれていた、タウンに居住するジェントルマン階級の先鋭的な空間意識が現れていることに注目し、この演劇ジャンルが、ジェントルマン階級、貴族階級、市民階級と地方のジェントリとの対立・葛藤を表象する際に、そこにタウン対シティ、タウン対宮廷、ロンドン対地方という複雑に重なり合った空間の対立の構図が見られることを具体的に検討する。ここでとくに解明すべき課題は、コメディ・オヴ・マナーズが描き出すマナーズの変化が、大火後のロンドンの都市空間の変貌を反映していただけではなく、演劇によるマナーズの表象が、都市空間の機能そのものを変化させうる可能性をも孕んでいたことである。すでに言及した Robertsの研究では、王政復古期演劇によるセント・ジェイムズ・パークやハイド・パークの表象が、こ

これらのパークの役割をいかに変貌せしめていたのかは未解明であったが、本研究は、王政復古以降のコメディ・オヴ・マナーズの発展と都市空間の変貌の相関関係に注目することで、社会史・文化史的アプローチによって演劇テキストが都市空間の機能そのものを変容させたことを解明する試みである。

## 2．研究の目的

本研究の目的は、王政復古以降の演劇が、ただ文学研究の対象にとどまらず、同時代の都市空間の変貌を研究する上できわめて重要な対象であることを示すことにある。たとえば、ウィッチャリーの『森の中の恋』(1671)とジョージ・エセレッジの『当世伊達男』(1676)におけるセント・ジェームズ・パークの表象を比較検討することで、都市空間の変容を明らかにする。さらに本研究は、同時代の大陸ヨーロッパの文学作品の翻案劇も対象にするが、翻案劇の分析は、時代や国境を越えた比較のための貴重な材料になるはずである。このように、本研究は、比較文学・文化の研究にとっても重要な役割を果たすことが期待される。

## 3．研究の方法

本研究の目的は、王政復古期から18世紀に上演されたコメディ・オヴ・マナーズの変化とロンドンの都市空間の変貌との相関関係を明らかにすることである。そのために、研究の方法としては、この演劇ジャンルのテキストを精読し、タウンにおける特定の社交空間(劇場、さまざまなパーク、ニュー・エクステインジ)に相応しいマナーズがどのように表象されていたのかを、イメージ、ステレオタイプやヴォキャブラリーに注目しながら、調査した。さらには、外国人旅行者のロンドン探訪記、ロンドンの旅行ガイドや地勢記録など演劇以外のテキストの精読を行い、同時代のマナーズと都市空間の関連を明らかにしようと努めた。

## 4．研究成果

従来1688-89年の名誉革命以降、「風儀改善協会」(The Society for the Reformation of Manners)が成立することで、都市空間のマナーズはこの運動の影響を受け、コメディ・オヴ・マナーズ自体も激変したとみなされてきた。本研究では、名誉革命以降のコメディ・オヴ・マナーズの分析を行うと同時に、「風儀改善協会」の活動の実態を調査することで、コメディ・オヴ・マナーズの発展と名誉革命後18世紀に至るまでのロンドンの都市空間の変換を関連づけた。

18世紀におけるコメディ・オヴ・マナーズの発展とロンドンの都市空間の変容を考察するために、その対極にある18世紀後半のゴシック演劇における空間表象も研究したが、その研究成果は、論文「Theatrical genius lay dormant after Shakespeare...」ホレス・ウォルポールの『謎を抱えた母』に見られるシェイクスピア崇拜のアンビヴァレンス(『専修人文論集』第109号収録)としてまとめた。ホレス・ウォルポールによる悲劇『謎を抱えた母』は、コメディ・オヴ・マナーズがロンドンの都市空間を舞台としてきたのとは対照的に、フランスのナルボンヌ城というゴシック的な場を主な舞台としている。その城は最終的にナルボンヌ伯爵夫人が抱え込んだ謎、つまり近親相姦というおぞましい罪を白日の下に晒す劇場として機能している。しかし、ここに名誉革命以降、コメディ・オヴ・マナーズを突き動かしていた欲望は抑圧されていた。たとえば、イングランド国教会の牧師ジェレミー・コリアーは「芝居の務めは徳を勧め悪徳を避けること、暴力や不正の悲惨な末路を示すこと、奇癖を暴き、愚行や虚偽を軽蔑させ、悪しきものすべてに汚名を与えること」と主張し、コメディ・オヴ・マナーズの戯曲内の不道德な箇所や人物を挙げていったのに対し、劇作家たちは有効な反論ができず、その結果、喜劇における倫理的・

道徳的要素を意識せざるを得なくなった。その流れの結果、コメディ・オヴ・マナーズは、観客を笑いつつ泣かせる「感傷喜劇」へと変貌することになった。

ウォルポールによる伯爵夫人のセクシュアリティの前景化はそうした抑圧に対するある種の反動とみなすことができる。このように伯爵夫人の積極的な近親相姦的欲望の表象は、ある意味で、ソポクレスの『オイディプス王』やシェイクスピアの『ハムレット』をも超越するものであったが、その結果、この悲劇は上演不可能になったのである。18世紀以降におけるコメディ・オヴ・マナーズとゴシック悲劇の主題的連関についてはこれまで国内外ではこれまで論じられたことがなく、じゅうぶんなインパクトがあったと考えられるが、今後その妥当性も検討されるべきである。

他方で、王政復古以降のコメディ・オヴ・マナーズの発展と都市空間の変貌の相関関係の研究成果は、論文集『コメディ・オヴ・マナーズの系譜 王政復古期喜劇から現代イギリス文学まで』に所収された論文「ウィリアム・ウィッチャリーの『田舎女房』における作法に対する戦略のアンビヴァレンス」としてまとめることができた。本論考は、本邦において言及されることはあっても論じられることはないウィッチャリーの喜劇『田舎女房』の作品論であり、1670年代に流行したセックス・コメディというきわもの的なサブジャンルの代表作として片付けられがちな、この喜劇の社交空間の表象の意味に迫った研究としてじゅうぶんなインパクトがある。さらに、本研究の課題に基づいてロンドンの社交空間（現在で言うところのショッピング・モールであるニュー・エクステインジや劇場、パークなど）の機能についても詳細に論じた。たとえば、『田舎女房』の第三幕第二場で、ピンチワイフは、妻マージェリーを伴ってニュー・エクステインジを訪問する際に彼は妻がほかの男性たちの好奇の視線に晒されないように男装させるのだが、この場面設定そのものが、王政復古期の劇場における上演において孕んでいたアンビヴァレンスを論じた。つまり、登場人物たちのニュー・エクステインジという社交空間における振る舞いが、劇場というもうひとつの社交空間で演じられたときに持ち得た意味を検討し、そのこと自体がニュー・エクステインジという社交空間におけるマナーズに影響を及ぼした可能性があることを論じたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 末廣 幹	4. 巻 109
2. 論文標題 “Theatric genius lay dormant after Shakespeare...” ホレス・ウォルポールの『謎を抱えた母』に見られるシェイクスピア崇拜のアンビヴァレンス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修人文論集	6. 最初と最後の頁 21-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 末廣 幹	4. 巻 44
2. 論文標題 ウィリアム・ウィチャリーの『田舎女房』における辭歌再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本ジョンソン協会年報	6. 最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------